

## 1. 実施概要

(1) 日時：平成24年10月30日（火） 13:30～16:00

(2) 場所：富山国際会議場

(3) テーマ：「コンパクトシティによるにぎわいづくり」  
～「市民が主役」のまちを目指して～

### (4) 進行

13:30～13:35 開会

・開会の挨拶 富山市長 森 雅志

13:35～13:45 趣旨説明

・国土交通省北陸地方整備局 建政部長 砺波匡

13:45～14:05 基調講演

・富山大学人文学部人文学科准教授 大西 宏治

14:05～14:35 自治体からの事例紹介

・富山市長 森 雅志  
・飯田市長 牧野 光朗

休憩（10分）

14:45～15:55 パネルディスカッション

・コーディネーター：富山大学 地域連携推進機構地域づくり・文化支援部門 部門長  
渡邊 康洋

・パネラー：上記市長2名、大西 宏治、GPネットワーク理事長 五艘光洋

15:55～16:00 まとめ 閉会の挨拶

・内閣府地域活性化推進室参事官 佐竹 克也

## 2. 開会の挨拶

- 一番大きな問題は人口減少だと認識している。ただ大都市圏の人口維持力と地方都市はまた違い、地方都市はいかにも脆弱だ。これをどうソフトランディングさせていくかが大変重要な課題だ。そういった時代の先を見据えてまちの活力をどう維持するか布石をうっていかなくてはならない。

- 富山市の計画は第一期はハード整備中心、第二期は市民の方がステージの上で大活躍していただくソフト事業を進めていく。富山市は環境未来都市の認定もいただいたので、そういったことも踏まえながら先進的な取組みを積極的に進めていきたい。本日のシンポジウムが実り多きものになるようご祈念申し上げる。



### 3. 趣旨説明

- 平成18年に中心市街地活性化法が改正され、現在全国で107の市の基本計画が認定されて進行している。第一号の富山市をはじめ各地で取組みが進んでいるが、それらの情報を共有しあうことで活性化につなげていきたいというのがシンポジウムの趣旨だ。



- 今年7月に日本再生戦略ができたが、その中でも中心市街地活性化は重点施策のひとつとして取り上げられているところだ。うまくいっているところ、いっていないところあると思うが、国としても真摯に受け止め、変えるところは変え、ともに進めていきたいと考える。

### 4. 基調講演の概要

- まず大学生がまちづくりに関わる仕組みがあることが、まちにとっても有益な効果をもたらすこと。各市町村の特徴を活かした、学生と結びつく装置であったり、仕組みを整備しておくことが必要なのではないか。
- 大学生とまちを結ぶ装置として「まちなか研究室」を発案した。これはまちづくり活動をする人々との結節点でもある。学生がまちづくりに関われる場所だ。この結果、学生がずいぶんまちなかにくるようになった。また商店主、地域住民などを招いて交流会なども開催した。また中心市街地の活性化をねらった「学生まちづくりコンペティション2012」も開催した。期待される効果として、学生と商店街の連携が促進される。学生にとってはまちづくりに主体的に参加することが期待できるのではないか。
- 地方の大学では学生とまちの接点が乏しく、まちの知識や印象をもっていない。そういう意味で若者とまちの接点をつくり出す装置が必要だと考える。まちなか研究室は富山市の支援・補助で運営されているが次年度もぜひ継続させてほしい。

### 5. 事例紹介

#### (1) 富山市

- 富山市の第一期の計画は、5年間で路面電車の利用者と中心商店街の来街者をそれぞれ1.3倍に、中心市街地の居住者を1.1倍にするという3本柱で様々な取組みを行ってきた。環状線化を進めた路面電車は予想を超える利用者となり、買い物目的でまちへ出る人が多くなった。滞在時間もマイカーで来る人より長いという結果が出た。市のコンサートホールでも積極的にワインを出しており、なるべく公共交通で来るということを促進している。

- 市の中心に再開発としてグランドプラザという広場をつくった。ヨーロッパの都市の中心に広場があるように、そこに人が集まり、オープンカフェやパフォーマンスなどができるようにしたら、土日は予約でいっぱいの状況だ。
- 「お出かけ定期券」という取り組みは、65歳以上の方に限り、一年に一度市に登録をしていただくと、ICカードの定期券で中心市街地まで100円で行けるといもの。約3割の高齢者の方が会員になっていて、一日2200～2300人の方が利用している。閉じこもりがちの方を外出させ、健康面にもよいものとなっている。
- 都心部を花で飾るという取り組みもやっている。富山市はほとんど捨て看板がない。まちににぎわいを呼ぶのは、行ってみたいくなるという魅力を付加することと考えている。

## (2) 長野県飯田市

- 飯田市のまちづくりは、かつての大火の経験を通じた、歴史あるりんご並木から始まっている。大火の復興がまちづくりの原点だった。文化的な面では、34年目を迎える日本最大の「いいだ人形劇フェスタ」があり、“人形劇が息づくまち”としてその波及効果は大変なものがある。
- 人口が減少していく中で、人づくり、まちづくり、産業づくりによって若い人が帰ってこられるような総合的な環境づくりが大事だと考える。“人材サイクル”と呼んでいる。中心市街地の活性化もりんご並木を中心として、まちづくり会社をはじめとする多様な主体により進められている。
- また低炭素な環境文化都市の創造をコンセプトに、市民の方々にも理解をいただきながら広めていこうとしている。補助金によってまちなかの街路灯もLED化した。これは市内の産業分野の方々に頼んで製品開発をしてもらったものだ。ほかにバイオマスの普及拡大や小水力発電の取組みなども市内の会社関わって行っている。さらにこれから先、東京まで数十分というリニアの時代になったときに、どんなまちになっているかを考えなくてはいけない、それも大きな課題と考えている。

## 6. パネルディスカッションの概要

《「市民が主役」のまちを目指して》

- (大西准教授) それぞれが自分の居場所を中心市街地で持てるようなまちづくりができればいいと考えている。たとえばグランドプラザのような快適な場所。そういう活動に教育の場から参加できたらいいと思う。
- (五艘理事長) 再開発を機にグランドプラザという広場ができ、その後グランドプラザネットワークができた。自らがまちを楽しもうというグループでNPOになった。私自身、まちなかに住む便利さを享受しているが、みなさんにももっと知ってもらい、まちなかに居住してほしいと思うし、お声掛けをしていきたい。毎年8月に平和通りでビアガーデンのイベントをやっているが、それに何千人も集まり、それを見るのが楽しい。
- (富山市長) 家族も含めて安心して住んでみたいと思うところ、そういうところを事業経営者も考えているのでは。教育、文化、医療、安全などの基準があるし、ライフスタイルなどそういうものを上質にしていくことかと思う。



- (飯田市長) 富山市も飯田市も歩いて楽しめるという共通したまちのつくり方を目指していると思う。飯田市では、毎月1回「モーニングウォーク」というものをしていて、参加するごとに必ず新しい発見がある。たとえば柳田国男が飯田市ゆかりの人だったとか、そのまちの歴史や文化を楽しみやすいことが暮らしやすいまちなのではないかと思う。
- (コーディネーター) さまざまな楽しみ方ができるまちというのが暮らしやすさにつながる。そして最初は行政がリードして、その後民間が受け継いで広げていき上質なものにしていく、そういうステップになっていくのだと思う。
- (大西准教授) 学生たちにまちづくりがどういうものかを体験してほしい。富山市はいまそういうまちになりつつあると。それがにぎわいの創出や新たな価値をつくっていくのではないか。
- (五艘理事長) 大手ファストフード店は子ども向けの商品を販売し、幼い頃からファンをつくって、それが大人になって当たり前のように商品を食べている。中心市街地で買い物をする人を増やす前に、まず、若い子たちにまちに来てもらい、好きになってもらうことが重要だと思う。だから学生が来てもらうことにも協力していきたい。
- (富山市長) ライフスタイルを変えていくアイデア…花束を持って電車乗ったら無料とか、カップルでプラネタリウムを見たら無料とか、そういったひとつひとつの積み重ねで、まちに出るとか、イベントに参加するなどのムードをつくっていくことが重要。遠回りかもしれないけど、最終的には効果的なのではないか。
- (コーディネーター) 行政の方たちが素晴らしい舞台、装置をつくってきている。そしてそこで動くのは次は市民だということが今回のメッセージになるのではないか。

## 7. 閉会の挨拶

- 現在、全国で107の市町村が中心市街地活性化に取り組んでいる。また環境モデル都市は、全国1700の自治体のうち13となっている。本日の2市の取り組みは全国では先駆的な取り組みと認識していただけたかと思う。活性化法は平成18年から概ね6年経過し、検証の時期に入っている。そういう意味でも本シンポジウムは有意義だった。また、迫りくる人口減少の中での中心市街地活性化の重要性を改めてご認識いただけたら幸いに思う。関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

